

## § 1.2 SCE・Net 創立時の回想と主な出来事

岩村 孝雄（顧問・二代目代表幹事）

### 1. SCE・Net 設立の頃

#### 1) 会員勧誘の方法

会員勧誘をどうやるか。この種の団体の永遠のテーマであり、成功すれば会は大いに発展する。まず発起人の知り合いから各自 10 人を集める。学会や各種の会合に参加して SCE・Net の宣伝勧誘をする。法人会員は専ら命尾さん、中島さんにお任せする。こんなやり方で動き出しそれなりに会員を増やしていった。SCE・Net の名が知られるようになってからは、毎年 10 名程度の新入会員があり、何人かの退会者が出るということが繰り返され、常時 100 人前後の会員の登録がみられるのが実情である。10 数名の幹事団による現在の会の運営方法から言って、この程度の会員数が限度であろう。法人会員に関しては予想より少ないが、初めに意図した法人会員に個別に技術サービスをするという点が生かせていないことが問題であろうかと思う。

#### 2) 会の運営費

会のための運営費を如何に調達できるかが次の問題である。法人・個人の会費を幾らにするかは激論の末に決定した。途中で法人会員の会費は値下げしている。外部からの依頼事項を増やし、事務経費として報酬の何パーセントかを会に入れていただくことは、何度かの議論で決定することができた。本来ならこの方式である程度の活動資金を確保するのが会運営の常道であろうが、技術屋の商売ではお得意さんの拡充がうまくゆかず、成功したと言えないのが現状である。経理の諸問題や、報告結果の責任問題等でも心配すべきことが色々思い浮かんだが、問題が出ることもなく無事今日まで続いている。今後外部受託をもっと増やすべく一層の努力が必要であろう。SCE・Net としては大変幸運なことに、スタート時に大きな技術評価作業や化学工学会の技術賞をまとめた本の出版という作業が入り、何がしかの蓄えができたことでその後の活動を続けることができた。また化学工学会から事務経費並びにネットシステム維持費を出していただいているのは、我々にとって大きな助けである。

#### 3) 会員の出身基盤の違い

100 人も技術者が集まるとその出身基盤や業務経験は多岐にわたり、またこれまで属していた会社によってもその思考形態や業務のやり方が違って来る。概して製造現場に永くいた化工技術者はチームで仕事してきたこともあり、一人で課題をこなすことに慣れておらず、指示待ちの姿勢が出ていた。こんなこともあり初めのうちは会員に依頼事項を投げかけても手を挙げる人が出てこない。幹事のほうから誘いかけると大部分の人は引き受けてくれる。一方エンジニアリング会社で仕事をしていた人達は、自分の判断で仕事を処理することに慣れているので、どんどん参加してくれる。今は依頼事項の処理のシステムが確立してきたが、最初の頃はパソコンを持たない人も多く、仕事と人とのフィッティングに苦労させられた。斎藤さんと小生で会員名簿を当たりながら、これはという会員に電話し、引き受けてくれる人を

探したものである。会員の経歴からいって当然のことではあるが、仕事を始めると皆立派に依頼事項を処理できていることから、会員はどなたも自信を持ってどんどん手を挙げてほしいものである。

#### 4) 研究会組織の創設

SCE・Net 設立とともに活動の専門分野として特に安全、環境マネジメント、品質保証を中心とすることが提案され、チームが結成された。その後外部からの依頼を増やす手段として、より専門性を明確にできる研究会を組織し、各研究会で依頼事項を獲得する試みがなされた。環境・安全・エネルギー・教育・装置材料の研究会組織ができ意欲的に活動しているが、外部依頼を増やすことでは必ずしも意図した成果を上げることができていない。研究会活動が各自の専門知識のレベルアップに寄与することに留まり、内部での活動に主点が置かれすぎているきらいがあり、外部への発信が不足している。教育、出版、講演での活動で幾つもの成功例が出ていることでもあり、今後もう一度依頼事項獲得の動きを見せてほしい。

## 2. 懇親の場としての SCE・Net

SCE・Net スタートから5年たった2006年に、SCE・Netの理念や会則、仕事のやり方等すべての面で見直してみようということになった。これは弓削幹事の力に負うところ大であるが、全てが見事にまとめなおされている。同時に高砂幹事他でやっていただいた会員に対するアンケートで、相当数の人が懇親の場を設けることを希望していたのは予想外であった。このことがあって道木幹事の率いる交流会で、見学会やゴルフ会を企画していただき、既に定着していた技術懇談会と相まって会員の懇親に役立つ場を提供できている。SCE・Net 結成時にそうであったように、仕事をするにはお互いの顔が目に浮かばないと取りかかるとに苦労するものである。これらの懇親の場でお互いが知り合うようになり共同での作業がやりやすくなっている。一方、昔の60歳定年ではなく、技術者は63~65歳まで会社に残っているケースが多くなり、SCE・Net 会員の平均年齢も上昇の一途である。こんなこともあってか仕事というより、懇談の場を求めて会員になる人も増えたようである。SCE・Net の性格も変わりつつあることから、今後のやり方を議論する時期が来ているといえよう。

## 3. SCE・Net のささやかな存在意義

日本の社会では個人に対する評価ではなく、まずはその人が属する会社とその肩書で相手を認識する。名刺を持たず「横浜の岩村です」といっても相手にしてくれない。悲しことに「元何々でした」と言ったほうが通りがいい。その意味で「(社)化学工学会 SCE・Net」の名がある名刺を持って、現役として顔を出せるのは、会員の皆さんのステータスのために少しは役に立っているのではなからうか。時々仕事が入り、会社時代でもやらなかった机に向かったの仕事ぶりを、奥さんに冷やかされるのも若さを保つ助けになっているのではないか。実際今の技術の進み方と新しい分野の出現は、我々の現役時代の知識や経験だけではあまり役に立たなくなっている。必然的に勉強もするし、頭も働かせることになり、脳の働きの退化を少しは遅くできているであろう。本を出版したり、大学で講義をしたりできたのも、会社時代には考えられなかったことである。本人のプライドを大いにくすぐっていると思っている。SCE・Net に入り、沢山のひと

知り合いになり、今までの一つの会社の中に閉じこもっていた時とは全然違った考え方に触れることができている。しかも会社での人間関係や昇進や仕事での不愉快さからも離れて、時に好きな仕事をし、上司の悪口ではなく、技術問題を肴に酒を酌み交わせることは大変楽しいことである。こんな場を提供できている SCE・Net は役に立っているものと自負できるし、またそれが 10 年間続いている理由でもあろう。あまり気張らないでこの後も自分自身の存在価値を高めていただきたい。そして多くの人との語らいを楽しんでいただきたい。数年前、団塊の世代が一斉に定年を迎えることで騒がれたことがある。SCE・Net の活動もシニアに生きがいを与えるという意味で一つのサンプルになるものとして注目された。二つの省からヒヤリングがあり、日経 BP でも取り上げられた。技術での社会貢献という目標は必ずしもまだ満足できるものではないが、シニアエンジニアに居場所を提供できていることは、この活動の結果として誇りうることであろう。今後の益々の発展を期待したい。